

延岡市 佐伯市 人口 75,048人 面積 903km<sup>2</sup>  
 127,924人 面積 868km<sup>2</sup>

2016/1/1 現在



# 日豊海岸 シーニック・バイウェイ

人のくに、美のくに九州 (日本風景街道 Q-2)



陣ヶ峰展望台から望む風景

# 目次

## 一 津々浦々で構成される「日豊海岸シーニック・バイウエイ」

## 二 リアス式海岸と共に歩んできた蒲江・北浦地域の人々

- 1 リアス式海岸地形により形成された特徴的な生活空間
- 2 独特の地形のなかで育まれた蒲江・北浦地域の歴史と文化
- 3 自然と人が織りなす生業（なりわい）の風景
- 4 受け継がれる神楽の文化

## 三 道路整備への歴史的悲願

- 1 一般道の整備
- 2 高速道路の整備
- 3 高速道路整備を願った人々の力

## 四 日豊海岸シーニック・バイウエイへのアクセスとエリア内での移動

- 1 域外から蒲江・北浦地域へのアクセス
- 2 蒲江・北浦地域内での移動
- 3 海上交通

↓ 深島のサンゴ



↓ パラグライダー(高平キャンプ場)



↓ 仙崎つつじ公園



五 日豊海岸シーニック・バイウエイ（蒲江・北浦大漁海道）のイチオシを体験する

六 日豊海岸シーニック・バイウエイを巡るくエリア別の見所紹介

- 1 蒲江エリア
- 2 北浦エリア（「ひむか遊パークうみウララ」エリア）
- 3 初心者でも楽しめるマリンスポーツ

七 道の駅等の観光拠点について

八 蒲江・北浦地域の祭り・ホテル・観光情報など

- 1 祭りなど
- 2 ホテルなど
- 3 食・特産品など



↑仙崎つつじ公園からリアス式海岸を望む



↑波当津海水浴場



↑ブリ養殖場

一 津々浦々で構成される「日豊海岸シーニック・バイウエイ」

日豊海岸シーニック・バイウエイは、大分県佐伯市蒲江から県境をまたいで宮崎県延岡市北浦町まで海沿いに展開する総延長約九六キロメートルのルートである(図1)。この地域一帯は、日豊海岸国定公園の一部を構成し、典型的なリアス式海岸の地形をなす。そして、リアス式海岸地形であることが、本ルートの様々な魅力のすべての土台となっていることを、このガイドブックを読み進めるに従って、理解できるであろう。



図1 日豊海岸シーニックバイウエイの概要

日豊海岸シーニック・バイウエイへの入り口となる最寄りの都市は、大分県佐伯市、あるいは宮崎県延岡市である。

いずれの街からも一旦、風景街道のルートに入ると、そこには典型的なリアス式海岸の風景が展開している。海岸沿いは岬と入り江が複雑に入り込み、入江にある港や集落、あるいは砂浜から海側を遠く眺めるといつも、切り立った山肌をもつ岬が海と空の風景に入り込んで来る(写真1)。

広大な水平線の風景で圧倒されるのではなく、囲われ感があるどことなくヒューマンスケールの、海と空と山のどかな風景という感じであろうか。入り組んだ岬と島に波は遮られるため、鏡のように静かな入り江は、のどかな印象を一層引き立てる。

人々の生活の拠点である集落や漁港は、波静かな湾に沿って展開している(写真2、3)。ただし、そもそも岬を形成する山々が海の間にまで迫っているために入り江の奥の低平地は小さく、集落の規模も必然的に小さい。岬の山に沿った海岸際にも家々や漁港が見

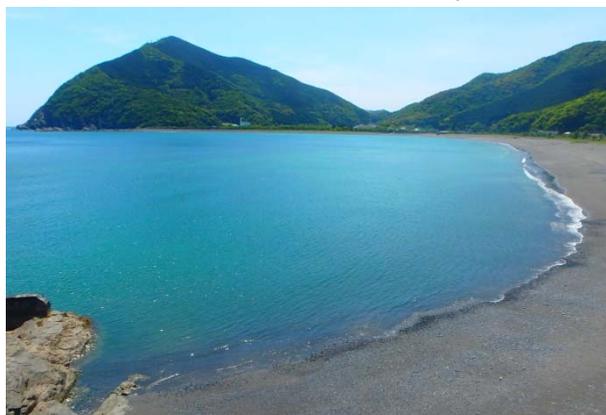


写真1 高山海岸からの眺め



写真2、3 湾に沿って展開する集落や漁港

られるが、これらはわずかに切り開かれた平場に点在している。  
 このようなこぢんまりとした集落や漁港の風景は、長い時間をかけて自然と共に歩んできた人々の足跡の風景であり、先述の岬でアクセントづけられた海と空のヒューマンスケールの風景に一層の安心感を与えてくれている。

ルートエリア内にはまた、いくつかの比較的大きな砂浜海岸が点在している。下阿蘇海岸、元猿海岸が代表的であるが(写真4、5)、外洋の波は岬や島によって打ち消され、入り江には弓なりの遠浅で波静かな白砂の浜が形成される。岬や島でアクセントづけられた海と空のヒューマンスケールの風景の足下には白い砂浜が伸びやかに広がる。この風景もまた、人々にヒューマンスケールで穏やかな印



写真4、5 上：下阿蘇海岸 下：元猿海岸

象を与える。これらの砂浜は海水浴場として利用され、ファミリー層も含め、多くの来訪客者を楽しませている。

さて、目を山の方に転じてみよう。リアス式海岸の典型的特徴であるが、内陸部の山はそのまま岬となって海に貫入するため、標高は高くないものの急峻な地形が多い。集落間の移動は海上であれば岬を回り込んで隣の入江に移動することになるが、陸路の場合は、この急峻な山を一旦越えなければならぬ。それぞれの岬を越える道路は、急峻な斜面に沿って延びるため、尾根側の木々が道路に覆い被さり、海が近いにもかかわらず深い山奥にいるような錯覚に陥る(写真6)。



写真7、8 上：たかひら展望公園  
下：横島展望台



写真6 岬を越える道路

ところが、薄暗い道路を抜けて岬の尾根に一旦出てしまうと、この風景は一変する。たとえば蒲江のたかひら展望公園や北浦町の横島展望台など、岬の尾根筋にはいくつかの展望台がある（写真7、8）。展望台からは、遠くには、静かな海に岬や島が幾重にもちりばめられる奥行き豊かな多島の眺めがある。太陽の光を反射してキラキラと光る静かな海を、大小の船が横切り、岬や島の

陰のあちこちには養殖筏が規則正しく並んでいる。

展望台から目を手前に移すと、急峻な岬の山の麓に先ほどまでいた集落や漁港がとて近く足下にある。漁業集落の屋根は密集し、こぢんまりと入江にたたずんでいることがよくわかる。距離が近いため、道路を行き来する車や港の漁船、目をこらせば港で作業している人まではつきりと見える。遠景・中景のパノラマの中に近景として人々の生活の場を合わせて見ることができ、人々が長い歴史の中で自然とともに生きてきたその全体像を、ありありと見ることができるのである。

津々浦々。日豊海岸シーニック・バイウェイにはこの形容がしつくりくる。津は港、浦は入江である。いくつもの港と入江が、岬や島を挟みながら連続的に連なっていく。このような地域では、地形の厳しい陸よりも海に向かって生活が拓かれてきた経緯があり、人々は海と共に生活している。このエリアを巡れば、豊かな自然と共に培われた人々の営みを知り、十分に味わうことができるであろう。

さあ、津々浦々の日豊海岸シーニック・バイウェイを巡る旅に出てみよう。

## 二 リアス式海岸と共に歩んできた蒲江・北浦地域の人々

### 1 リアス式海岸地形により形成された特徴的な生活空間

リアス式海岸地形の特徴を紐解いてみよう。集落は、岬で囲われた入江の奥にこぢんまりとたたずむ。集落の背後には山がすぐに迫っているため、陸路での他地域への移動は容易ではない。また、入江では平地部が小さいので、耕作地も必然的に小さく、農業は小規模となる。海に近い山は急峻であり、利用できるスペースは限られる。もっと内陸に入れば広大な山地空間が展開しているが、そこはもう他の地域であろう。

一方、集落は海に向かって開かれている。そもそも波静かな入江は天然の良港である。船を利用して岬を回り込めばすぐに隣の集落に移動でき、また海はそもそも遠方と直結し、全国、世界へと開かれている。その上に、静かな入江、岩礁や砂の海底地形、複雑な潮流の流れ、沖に出れば豊予海峡の大海といった多様性が、豊かな海の幸を与えてくれる。

### 2 独特の地形のなかで育まれた蒲江・北浦地域の歴史と文化

蒲江・北浦地域の歴史的・文化的な特徴を理解するには、先述のような「海を通じて一定の距離感を持ちながら外に開かれつつ、陸においては周縁に位置づけられてきた空間」であることを踏まえるとう理解しやすいだろう。海から陸からのいずれにしても「一定の距離感・周縁感」がこの地域を特徴づけてきたように思える。

北浦町史と蒲江町史に、ざっと目を通してみると、縄文時代の人々

の生活の痕跡はいくつかあるものの小規模で、さらに弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代から現代に至るまで、歴史の表舞台に登場するような特別な出来事や史跡があるわけではない。しかし、様々な伝承や史実をたどると、この地域はやはり海とのつながりで生きてきたことがわかる。

神武天皇東遷の経路をみると、宮崎県美々津の港を出発した後、蒲江の畑野浦や米水津に停泊して北上したとの伝承があり、この近辺には、それにまつわる伝承地や地名が見られる。代表的なものとしては、蒲江の畑野浦には伊勢本社（いせもとしゃ）（写真9）がある。神武が嵐を避けて畑野浦に寄港した際、同地区の松合山（神武ガ原）で天候を占い、さらにこの村の安泰を祈願して十二本の矢を海に放ったことに、村人が感謝して伊勢本社を祭ったとされている。そのご神体は、一行が祈願の際に使ったといわれる水入れの古土器とのことである。

ちなみに、畑野浦の地名は、神武がリアス式の曲がりくねった入江の美しきに見とれて美しき曲（わだ）の浦の地と言われ、「わだのうら」がいつ



写真9 伊勢本社

しか「はたのうら」になったとのこと。また、米水津は、神武がこの湾に立ち寄り、米と水を補給したことに由来するといわれている。このあたり、地元の伝承を拾いながら地名の由来をたどってみると、思いもよらない発見がありそうである。

歴史上の記録にこの地域が登場するのは、奈良時代に編纂された「豊後国風土記」で、蒲江地域を含む「海部郡」の地名がある。同書には、「この郡の百姓は、みな海辺の白水郎（あま）なり。よりて海部の郡という。」と記され、また、漁民が天皇に海藻を献上したという記録も残るとのことである。古代より、海の幸を産出する地域として認識されていたことがわかる。

また、蒲江の西野浦地区には、平家の落人伝説もある。史実か否かは実際に確認されているわけではないようであるが、たとえば貝の名前にアントク（安徳・壇ノ浦で海中に没した幼い天皇）やジョウロウ（上臈・年功を積んだ位階の高い人）があったり、平家に由来すると思われる地名が各所に残っていたりする。さらに藤原一族の伝説も残るようである。これらは蒲江地区が海を通じて、中央と何らかのつながりを持っていたことを物語るものであろう。浦々でつながる北浦地域についても、都との交流の舞台であった可能性は十分にある。なお、平家や藤原氏との関係は、蒲江町史、北浦町史ともに記述されていない。今後の調査研究にロマンを託そう。

さてさて、平家一族や藤原氏は中国大陆との貿易を推進していたので水軍との関わりも強い。この意味では蒲江・北浦地域が水軍との関係を持つことも何ら不思議はない。こちらは歴史的事実である。たとえば、北浦に近接する延岡市浦城町には、浦城水軍城址が（写真10）がある。正確な築城者や年代はわかっていないが、室町期以来、豊後・瀬戸内海方面を勢力範囲とした四国伊予を本拠地とした河野水軍の支城だと言われている。城は浦尻湾の奥の「おや鼻」といわれる小さな半島にあるが、この場所は沖合からまったく見えない場所にあり、まさに水軍の拠点にふさわしい。水軍はまた、中世では「倭寇」でもあった。浦城は、豊後・瀬戸内海のみならず、朝鮮半島、中国大陆に対しても直接、窓が開かれていたとも考えられる。平家・藤原一族との関係も、あながち根も葉もないものではないだろう。

時代を下って、江戸時代の蒲江・北浦はどのような地域であっただろう。蒲江地域は佐伯藩、北浦地域は延岡藩に属する。

この時代の蒲江地域の特徴を表すのはなんとと言っても「佐伯の殿様 浦でもつ」の言葉で



写真10 浦城水軍城址

あろう。佐伯藩の財政を実質的に支えていたのは蒲江地域からの諸税であった。税は海産物の収量だけでなく鰯などを干すための浜の営業権、漁業・運輸業の許可、漁場の利用、船の所有等に関わる多様な対象にかけられており、これらが全体として佐伯藩の収入となった。実際、佐伯藩の財政規模は江戸期に拡大し続けたが、この源泉は漁業・海運業であった。他方、農業については、江戸期を通じて藩によって拡大策、支援策がとられたものの、そもそもの地形上の制約や自然災害の影響もあり、顕著な発展は見られなかったようである。

北浦地域についてもやはり漁業・海運が中心である。特に島浦地区は、参勤交代の立ち寄り港であったため、江戸期を通じて多くの人・モノが行き来した。漁業の経緯については少し興味深い。北浦町史によると、江戸初期の漁業は紀州の出稼ぎ漁民に依るところが大きかったようである。また、中国・四国地方の漁民も訪れていた。

紀州漁民は当時、関東から九州南部まで船団を組んで広範囲に活動していた。ここ北浦では鰯漁を主とし、獲られた鰯は紀州漁民家族によって北浦の浜で干鰯に加工され、関西に送られて綿作の肥料となった。干鰯は蒲江・北浦地域のいわば特産ブランドとなった。

江戸期の時代が下るにつれて、ようやく北浦の人々が農作物の不作等から漁業に転換し、地引き網漁を始め、漁法が拡大するにつれて、漁業の主役が紀州住民から地元漁民に移った。その間、地元と他国漁民との衝突や、蒲江地域の漁民との衝突（漁場争い）が幾度もあったことが記録に残されている。

さてさて、北浦地域の文化、気質や言葉は、現在でも延岡をはじめとした周辺地域と異なり、関西、中国・四国系の色合いが濃いことは周知のことであるが、奈良・平安時代のつながりに加え、江戸期に大量の漁民の移動があり、彼らとの交流が密であったことがその理由なのであろう。

### 3 自然と人が織りなす生業（なりわい）の風景

日豊海岸シーニック・バイウエイの別称は「蒲江・北浦大漁海道」。先に紹介した地形や歴史も含め、当然のことながら、現代のこの地域を語るにはまず「海業（うみぎょう）」に目を向けなければならぬ。

リアス式海岸は複雑な海岸・海底地形を形成し、また、潮の流れも地形によって複雑に変化する。静かな入江もあれば潮がぶつかる場所もあり、また、浅瀬も深場も磯も、ありとあらゆるシチュエーションが蒲江・北浦の海に展開する。とりもなおさずそれは、魚・貝・甲殻類・海藻などの種類の多さにつながり、これが「海業」を豊かにしている。

蒲江・北浦地域の津々浦々を辿ってみよう。入江の必ずしも大きな漁港には、大小様々の漁船が停泊している（写真11）。船の大きさや形は、養殖、沿岸、沖合く外洋といった漁場や漁獲対象、そしてそれに応じた漁法によって様々があり、船の種類が多さから



写真11 大小様々な漁船

我々は、この海の豊かさを知ることができよう。港で漁の準備をしている人、近くで遊んでいる親子連れ、沖合から帰ってくる船や今から出港する船。こんなこぢんまりとした港の風景には自然と調和した人の生活のぬくもりとたくましさがあり、それが訪れる人の心を穏やかに、そして豊かにしてくれるだろう。

養殖に関わる風景も美しく味

わい深い（写真12、13）。浜から沖合を見渡せば、あるいは浜の背後にある岬の尾根筋や展望台から海を見下せば、海に浮かぶ養殖筏が目に入ってくる。波静かな湾内や岬の足下には、養殖筏（生け簀）が規則正しくいくつも並んでいる。養殖の対象はブリ、カンパチ、鯛、シマアジ、マサバ、岩ガキ、ヒオウギ貝などがあり、どれも蒲江・北浦地域の特産品である。また漁獲後に畜養して品質を上げたアジやサバは地域ブランドになっている。生け簀の位置、形や大きさはこれらに応じて多彩であり、それが海の風景にアクセントを与える。

なお、養殖は現在では蒲江・北浦地域の重要な産業となっている



写真12、13 海に浮かぶ養殖筏

が、実はここに至るまでには多大な苦労があったようである。蒲江地域の養殖漁業は、実は真珠から始まる。大正一〇年には大分県の指導により上入津村に養殖試験場が設置された後、昭和一〇年代に西野浦で本格的な養殖が開始されたが、戦時中に閉鎖されている。再開されたのは昭和二七年の畑野浦からで、その後一気に真珠養殖が蒲江町全体に拡がり、町の経済に貢献したが、以降、価格低迷期での衰退、高度成長による反映、感染症蔓延による衰退を経て、現在では数軒の養殖業者のみが、工夫を凝らしながら生産を続けている。

魚の養殖は、昭和初期に実験的に開始されていたものの、真珠養殖が盛んなうちは本格化せず、昭和四〇年代に真珠の大暴落を契機として、真珠から魚類養殖への転換が進んだ。当初は、ハマチ・ブ

りの養殖が主体であったが、養殖技術の向上も進み、現在ではタイ、シマアジ、カンパチなど、時代のニーズに即応した生産が行なわれている。

北浦町では昭和二〇年代後半の鰯の不漁期をきっかけとして昭和三〇年代初期からハマチを中心として始まっている。この点は、真珠養殖を主体としていた蒲江よりも早い。その後、ハマチの養殖は軌道に乗り、高度成長期には「ハマチ御殿」が建つほどの盛況を迎えたが、その後、養殖ハマチ特有の肉質の敬遠、バブル崩壊、病気の蔓延などが原因となって低迷した時期がある。現在では多品種化、品質管理の高質化、ブランド化を行なう、養殖業の維持・発展が目指されているところである。

もう一つ。聞き慣れない言葉かも知れないが、陸上養殖も盛んである。陸上養殖は文字通り、陸上に設置された水槽内で養殖を行うもので、水温、水質、衛生管理がしやすく、環境変化や天候によるリスクを避けることができる方法である。この陸上養殖の風景は一種独特であり、蒲江の西野浦地区がその代表格であろう。海沿いに地区を辿ると、通称「ヒラメ小屋」とよばれる独特の形をした平屋のヒラメ養殖場が並んでいる(写真14、15)。黒ずんだ板壁、低い屋根と深い奥行きは、穏やかな入江の風景にかなり強烈な印象を与える。地元の方々には気にもとめない日常の風景かもしれないが、ここを訪れる者にとってはなかなか印象深い生業の風景である。

陸地の方に目を転じてみよう。冒頭より述べてきたとおりリアス式海岸の陸地部は急峻な地形が多く、根本的に農業にとっては厳しい

環境にある。歴史の項では触れなかったが、蒲江・北浦地域では古くから農地拡大に務めてきたものの、地形上の制約があり水田はさほど拡大していない。江戸期には段々畑や焼き畑などの農業が営まれていたようである。それでも一定の地域経営が成り立っていたのは、貧弱な農業生産を補える水産・水運業があったからであるが、もっぱら農産物で生計を立てる人々にとっては、農業生産拡大が悲願の歴史であっただろう。

この農業に関わる先人達の努力をうかがい知ることができる代表的な景観をここでは二つほど紹介しておこう。一つ目はシシ垣である。シシ垣は「猪垣」「猪鹿垣」「鹿垣」などとも書かれる、その字のとおり通り猪や鹿からの獣害から農作物を防御する垣で、大分県



写真14、15 ヒラメ小屋の外観と内観



写真16 シン垣

ている。これらの正確な築造年代は不明であるが、江戸時代後期には既に存在していたようである。

これらのシン垣は、山中を歩かなくても、尾根を越える道路沿いから見るができる。急峻な地形の中で沢山の石を現地まで運び、一つずつ積み上げ、それを何キロも連ねていく先人の労苦は想像を絶する。極めて条件が不利な農業生産環境において、人々が生活の糧を求めてきた歴史がそこにある。

農業に関わる代表的な景観の二つ目は北浦町の地下（じげ）地区の茶畑である（写真17）。「日本の里一〇〇選」にも選ばれた茶畑

南部の山中に多く残るが、蒲江地区でも全域にわたって見ることが出来る（写真16）。たとえば蒲江浦の旧蒲江小学校から高山海岸に面した高山地区にかけて山中の標高五〇メートルあたりの場所に、高さ一・六〜二メートルの高さの石積みが続いており、地元では大垣と呼ばれる。また西野浦地区では標高二〇〇メートルの稜線の尾根から海岸部までの急傾斜面に、石垣が延々と築かれ

は、標高二〇〇メートルほどの山の急斜面に沿って拡がっており、一ヘクタールにも及ぶ。弘川展望台から茶畑を見ると、その背景には海が見え、特にお茶や草木が芽吹くころには、爽やかな新茶のグリーン色と遠くに臨む海の青さとのコントラストが見事である。最近では「日本のマチュピチュ」とも呼ばれている。

この茶畑は昭和四四年から開墾されたが、これは国の「開拓パイロット事業」の指定を受けてのものであった。開拓パイロット事業は戦後農地開拓政策の末期に位置づけられたもので、農業経営規模の拡大による自立経営の育成が目標とされていた。地域の方々はこの事業に手を上げ、それまでの麦や甘薯栽培から茶生産への転換を図った。その結果を今の風景として我々は見ているのである。厳しい条件の中で農業生産の拡大を続けてきた地域の方々が生み出した生業の風景がここにある。



写真17 地下茶山に広がる茶畑

#### 4 受け継がれる神楽の文化

九州は各地に神楽が継承されているが、蒲江・北浦地域はエリアがさほど広くないにもかかわらず、多様な神楽が存在することが特

徴である。(写真18～20)

蒲江地域には、採り物神楽である佐伯神楽系、日向系岩戸神楽の流れをくむ蒲江神楽(二流派)、大野系岩戸神楽の流れをくむ葛原神楽系の三系統四流派の神楽が十二地区で傳承されている。ちなみに採り物神楽とは面を着けない直面(ひためん)で、扇・鈴・御幣などの採り物だけで舞う神楽で、岩戸神楽は配役ごとに面・衣装を異にする演劇的な神楽である。

北浦地域では、海岸部では大和系神楽とされる市振神楽が七地区で、内陸部では秩父系神楽とされる三川内神楽が五地区で傳承されている。三川内神楽は蒲江町の蒲江神楽(丸市尾神楽)とのつながりが深いが、三川内神楽は蒲江・北浦地域の他の神楽とはかなり異



写真18 佐伯神楽



写真19 蒲江神楽(丸市尾神楽)



写真20 葛原神楽

なお、このようにして各地区で集落の人々によって大切に傳承され、発展してきた神楽は、人口減少の中で厳しい状況を迎えている。たとえば、以前は集落ごとに奉納されていたが、特定の神楽保存会が周辺の複数地区ににかけて奉納する形となっていたり、あるいは時間短縮がされ、舞の演目が少なくなっていたり

なる性格を持つようである。

これらの神楽は、古いものは江戸時代以前からすでにあつたようであるが、その発祥を裏付ける正確な記録は残されていない。また、多くの地区での神楽については明治から大正、昭和初期に別の地域の教えを受け導入されて、その後発展した経緯がある。それぞれの地区では、昔より何らかの祭りや舞はあつたとは思われるが、より立派な神楽を奉納したいとか、より地区の結束を固めたいという思いが、新たな神楽を導入させたのであろうか。

そして現在見られる蒲江・北浦地域の神楽の多様性は、その伝播ルートが多様性でもある。相手地域と何らかの歴史的・人的なつながりがあるからこそ、その地域の神楽が導入されたのであろう。ここに、海や山を通じて多様な地域とのつながりを持つ、北浦・蒲江地域の特徴が見て取れる。

している。神楽保存会も、後継者不足に悩んでいるようである。

この地域を訪れるよそ者としては、うかつな事は言えないが、まずは訪れて実際に見てみることは大事であろう。この地域の神楽の特徴は観光地化されておらず地元の人々の祭りが中心となっているが、できるだけ多くの人が訪れて、外からの目でその価値を再認識・再発見することも、神楽や地域の存続にとってプラスになることと思われる。

### 三 道路整備への歴史的悲願

既に繰り返し見てきたように、歴史的に見ると蒲江・北浦地域の主要な交通路は海上航路であった。昭和初期には、高知や宇和島、大阪との定期航路があり、古江や蒲江に寄港していたが、日中戦争の影響で廃止された。また、沿岸航路については延岡と北浦、蒲江を結ぶ航路は戦前から戦後まで運航されていたが、道路の開通に伴うバス運航の進展に伴って徐々に衰退し、昭和五年の延岡―北浦の定期航路廃止をもって終了した。

とはいえその後、佐伯から延岡に至る沿岸地域の道路整備だけでなく、そもそも蒲江・北浦地域が大分や宮崎を介して広域的に九州の諸都市とつながるまでの道のりは非常に長かった。道路網を介して外部と直につながることは、この地域の人々の歴史的な悲願であった。蒲江町史、北浦町史をみても、道路網整備の経緯について相当地の紙面が割かれていることから、このことがうかがえる。

#### 1 一般道の整備

リアス式海岸の沿岸のまちや集落を移動するためには、海岸に沿った曲がりくねった道か、山越えの道を利用するしかない。当然のことであるが、いずれの道も時間がかかり危険性が高いとともに、自然災害の影響も受けやすい。より早く、より確実・安全に移動できる道の建設は、生活、産業、医療・福祉等、何を考えるにしても蒲江・北浦地域の人々にとって極めて重要な基本条件である。

ただし、比較的最短距離かつ自然災害を受けにくい形でまちや集落を結ぶためには、橋かトンネルの建設が必須となる。蒲江・北浦地域の道路網整備の歴史は、トンネル整備によるバイパス建設の歴史でもあった。

たとえば国道三八八号について見ると、蒲江地域では、高山トンネル、長津留トンネル、蒲江トンネル、畑野浦第一、二トンネルなど、北浦地域では、古江トンネル、東谷トンネル、鶴山トンネル、新須美江橋、新須美江トンネル、八重橋、熊野江大橋、熊野江トンネルなど、数多くのトンネルと橋がある。これらの多くは、旧国道三八八号のバイパスとして建設され、地域の交通環境を劇的に改善した。たとえば古江バイパスは、旧道で七・三キロメートルのところを二・七キロメートルで結び、所要時間は二五分のところを五分になるほどであった。

道路整備は国道だけでなく、県道、市道（合併前は町道）でも推進されているが、併せて、蒲江北浦間では農免道路が、鶴見・米水

津と蒲江の間では広域農道が、北浦町内の古江地区と直海地区の間ではふるさと林道が、多くのトンネル建設を伴いながら整備されてきた。これらは建設のための財源が一般道路とは異なるが、利用側から見ると何ら違いは無い。#

# トンネルや橋梁の建設には多大なコストがかかるが、前述のような道路整備の着実な進展は、関係自治体や地域住民が一丸となって建設推進を望んだ結果である。両町史には、歴代の町長や議会・議員による陳情の経緯や、各道路の開通式が盛大に執り行われたこと、そしてその開通式での町長の言葉が紹介されている。そしてこれら道路の完成を「先人の偉業」と記しているのである。#

# この地域を巡る際には、道路、トンネルや橋にも目を向けていただき、地元の方達の積年の努力に思いをはせてみて欲しい。

## 2 高速道路の整備

一般道整備によって蒲江・北浦地域内のまちや集落が相互に円滑に結ばれ、さらに佐伯、延岡と蒲江・北浦地域との間も利便性が高くなった。これはもちろん大切なことであり、地域内と近隣の地域との間で生活利便性は格段に高まった。しかし、蒲江・北浦地域とつながった佐伯、延岡のまち自体が、そもそも不便だと言われる東九州地域の、そのまた中央部に位置しており、大分県側、宮崎県側、熊本県側からのアクセスが格段に弱いことは否めない。

蒲江・北浦地域における広域アクセシビリティの強化は、生活利便性の向上のみならず、交流圏の拡大を通じて地域産業を発展させる基盤となる。特に水産物は鮮度が重要であり福岡や関西、関東といった大消費地との時間距離短縮は長年の悲願であった。さらに、観光客もより遠方から呼べることもつながる。

「東九州自動車道を通じて、高速道路・高規格道路だけで九州各地そして全国とつながる」、これが蒲江・北浦地域はもとより東九州側の地域全体の積年の悲願であったことは想像に難くない。

実際、九州縦貫道で福岡と熊本が完全に直結したのが昭和五〇年、九州縦貫道および宮崎自動車道（九州縦貫道宮崎線）で宮崎市、福岡市、鹿児島が直結したのが平成七年、大分自動車道で大分と福岡が完全に直結したのが平成八年であることを考えると、東九州自動車道で北九州と宮崎の区間が直結したのが平成二八年というのは、様々な事情があったにせよ、沿線の方々にはとても長い時間であったろう。

## 3 高速道路整備を願った人々の力

改めて蒲江・北浦地域近辺での東九州自動車道高速道路の整備の経緯を見ると（図2）（写真21）、蒲江―佐伯区間の開通が平成二七年、佐伯―津久見間が開通して佐伯から大分まで直結したのが平成二〇年、北浦―須美江間が開通して蒲江―北浦―延岡―宮崎が直結したのが平成二六年であり、そして平成二八年の椎田南―豊前間の開通でようやく高速道路によって九州の周回が可能になったとこ



図2 東九州自動車道の整備の経緯



写真21 東九州自動車道開通式

ながらない」との認識を早い段階でもたれ、日豊海岸シーニック・バイウェイ研究会を結成して、観光客をもてなす様々な仕掛けを民間主導で次々と打ち出されたのである。日豊海岸シーニック・バイウェイは、この方々の活動から始まったと言っても過言ではなからう。そして現在も、「伊勢えび海道まつり」をはじめとした催しやキャンペーンなど、多彩でエネルギーな活動を続けられている。

これらのおもてなし活動については、

ろである。

このように平成二〇年代後半には開通ラッシュを迎え、蒲江・北浦地域も含め、東九州地域はようやく他地域並みの高速道路環境を手に入れることができた。振り返れば、東九州自動車道の建設は時代の波に翻弄された観もある。

平成一四年の新直轄方式の制度化、平成一七年の道路公団民営化、平成二一年の政権交代および道路特定財源制度の廃止、この背景にある平成一〇年代後半から二〇年代前半までの公共事業に対する強い風当たり等、平成一〇年代、二〇年代は道路、とりわけ高速道路建設を取り巻く状況は厳しく、変化のめまぐるしい時期であった。東九州自動車道は、交通需要の低さから、「無駄な高速道路」の代表

選手のようにマスコミで報道された時期もあった。

このような時代の荒波にもまれながら、それでも東九州地域の私たちは粘り強く建設促進のための運動を続けた。県知事、市町村長、議会あるいは商工会議所等の民間団体による多くの期成同盟会の、陳情をはじめとした各種の活動が熱心に行われたことは言うまでもないが、ここでは「蒲江道づくりを考える女性の会」について少しだけ触れおきたい。

同会は文字通り、蒲江地域の女性で構成され、高速道路建設促進を訴える活動を地道に続けてこられたが、あわせて「たとえ高速道路ができて、観光客を呼び込める資源がないと地域活性化にはつ



図3 蒲江・北浦地域への車でのアクセス

「五 日豊海岸シーニック・バイウェイ(蒲江・北浦大漁海道)のイチオシを体験する」の章で詳しく紹介する。

#### 四 日豊海岸シーニック・バイウェイへのアクセスと

##### エリア内での移動

#### 1 域外から蒲江・北浦地域へのアクセス

図3に、蒲江・北浦地域への交通アクセスを示す。自動車にせよ鉄道にせよ蒲江・北浦地域への入り口となるのは、佐伯と延岡である。

佐伯も延岡も、東九州自動車道で大分方面、宮崎方面から直結し

ており、佐伯は大分から約四〇分、延岡は宮崎から約七〇分で到達できる。福岡市方面からは、九州自動車道を下り鳥栖ジャンクションから大分自動車道に入り、大分から蒲江・北浦地区に入ることになる(約三時間)。北九州市方面からは東九州自動車道を直接南下する(約二時間半)。なお、熊本方面からは現在、熊本地震の影響で国道五七号が一部区間で利用できないため、ミルクロード経由で阿蘇山北側に抜け、豊後大野市から佐伯に入るか、あるいは松橋ICから国道二一八号を利用して延岡に入るルートがあるが、現段階では、東九州自動車道で鳥栖ジャンクションに向かい大分自動車道で佐伯に入る方が、疲労も少ないであろう。

なお、佐伯港と高知県宿毛港の間にはフェリーが就航しており、一日に三往復の便がある(写真22)。

あるいは大分港とは神戸、大阪が、別府港からは大阪が結ばれているし、さらに別府港、大分港、臼杵港は愛媛県八幡浜港と、佐賀関港は愛媛県三崎港とそれぞれフェリーで結ばれており、海路で佐伯市、あるいは大分県内に入ることも容易である。

佐伯か延岡に到着すれば、佐伯―延岡の区間の東九州自動車道には、北から、



写真22 フェリー(佐伯港~高知県宿毛港)

佐伯IC、佐伯堅田IC、蒲江IC、蒲江波当津IC、北浦IC、須美江IC、北川IC、延岡IC（以上、東九州自動車道無料区間）のインターチェンジがあり、目的地に近いインターチェンジで降りれば良い。ちなみに北浦ICと蒲江ICの間は二〇分の所要時間である。

鉄道を利用する場合は、直近であれば佐伯駅か延岡駅で下車し、レンタカーを利用されることをお勧めする。バスは佐伯駅から蒲江、丸市尾を経由して波当津に至る大分バスがあるが、便数は日に六便程度（平日）で少なく、土日祝日は減便される。また、延岡バスセンターからは須美江、阿蘇、古江を経由して宮野浦に至る路線があり、平日一日一便が運行しているが、やはり土日祝日は減便される。さらに、北浦と蒲江を結ぶバスはないので、やはりバスでの旅は難しいだろう。

## 2 蒲江・北浦地域内での移動

先述のように、東九州自動車道の蒲江IC、蒲江波当津IC、北浦IC、須美江ICがあり、蒲江・北浦地区での移動の基点となる。佐伯市内から一般道を通って蒲江に向かうには国道三八八号で番匠川を渡り、南下できる（図4）。国道三八八号はそのまま畑野浦から主に海沿いを走り、丸市尾浦地区から山間部に向かう。ちなみに佐伯から畑野浦までの区間には峠を越える必要があるが、曲がりくねった区間はごくわずかなので初心者ドライバーでも問題は無かるう。



図4 蒲江・北浦地域内での移動

所要時間については、佐伯市内から「蒲江海の資料館」までは約四〇分、「海の資料館」から「かまえインターパーク」まで約一〇分、そこから丸市尾浦地区まで約一〇分の距離である。ちなみに「かまえインターパーク」は文字通り、蒲江ICから自動車道を降りて直ぐのところであり、域外からの利便性が高い地区にある。



図5 丸市尾浦地区から北浦町古江



図6 古江から延岡市内

ンネルで通過するルートを通っており、海が見渡せる区間はさほど多くない。実はいくつかの区間では「日豊リアスライン」は国道三八八号から外れて旧道側に指定されている。実際、古江と延岡市内の区間の見所である浦城海水浴場、七ツ島展望所、須美江海水浴場、熊野江海水浴場、尻浦展望台

丸市尾浦地区からは県道一二二号が北浦町古江に向かって延びている。ただし、この県道は、丸市尾浦地区と波当津地区の間は海沿いを走り景色も良いが、波当津地区と古江地区の間ではリアス式海岸の尾根をいくつも越えるため、カーブも多く見通しも良くない場所が多い。道幅も決して広くないため、運転に自信のない方にはあまりお勧めしない。古江地区は北浦ICが、波当津地区は蒲江波当津ICがあるため、そちらを利用する方が安心であろう。もちろん、遠見山の登山や横島展望台に行く場合はこの県道を通ることにするので、その際は注意して運転されたい。なお、横島展望台だけが目的地であれば、北浦ICを降りて直ぐ、古江直海ふるさと林道



写真23 横島展望台の全景

に入るとスムーズに北浦町直海地区に着く。直海地区から横島展望台は比較的近いので、こちらのルートをお勧めしたい。(写真23)

古江から延岡市内まではまた国道三八八号が繋がっている。延岡市内から古江に至り、それから内陸に向かう国道三八八号のほとんどの区間は「日豊リアスライン」と呼ばれているが、そのほとんどは内陸をト



写真24 日豊リアスライン

美江海水浴場、熊野江海水浴場、尻浦展望台等は、旧道側の区間内にあるため、周遊する場合は道路案内に注意しながら、日豊リアスラインを辿ってみて欲しい。(写真24)

### 3 海上交通

日豊海岸シーニック・バイウェイのエリアは、数多くの島があり、海を中心としたレジャー観光すなわちブルーツーリズムの舞台となっている。スキューバダイビングや釣りなどのコアなレジャー客は個人的に船をチャーターして目的とする島や海域に向かうことも多い。このような情報は、マリンスポーツショップや釣り船・渡し船をインターネットで検索すれば、数多く見つけることができるため、そちらを参照していただくとして、ここでは定期航路の紹介をしておきたい。

定期航路は日豊海岸シーニック・バイウェイのエリア内には二つあり、蒲江港からは屋形島・深島への航路(写真25)、もうひとつは浦城港から島野浦島の島浦港への航路(船の写真26)である。後ほど「五 日豊海岸シーニック・バイウェイ(蒲江・北浦大漁海

道)のイチオシを体験する」の中でまた詳しく紹介するが、屋形島・深島は珊瑚礁があり、また屋形島の砂浜にはハマユウの群生がある。また、島野浦島には遠見場山のミツバツツジと、島北側の海中のオスリバチサンゴの群生が有名である。

所要時間と便数については、蒲江港と屋形島の間で一〇分、屋形島と深島間では約二〇分で、日に三往復、浦城港と島野浦島の間は高速艇で一〇分、フェリーでは二〇分で、両便あわせて日に一六往復ある。いずれの島への所要時間はわずかで便数も多いいため、気軽に訪れることができる。

なお、蒲江の元猿海岸近くにある大分県マリンカルチャーセンターからは、グラスボート「遊覧船マリンコーラル」が就航しており、



写真25 定期運航船(蒲江港~屋形島・深島)



写真26 定期運航船(浦城港~島野浦島)



写真27 マリンコーラル

楽しむ方は人それぞれ、様々にあることは言うまでもないが、それでもまずは、「これだけは外せない！」というものを紹介しないわけにはいかないだろう。いわゆる「日豊海岸シーニック・バイウェイのイチオシのおもてなし」である。それらは日豊海岸シーニック・バイウェイ研究会の活動と深く結びついている。

深島、屋形島の珊瑚礁を所要時間一時間程度で観察できる（写真27）。

## 五 日豊海岸シーニック・バイウェイ（蒲江・北浦大漁海道）のイチオシを体験する

冒頭で述べたように、日豊海岸シーニック・バイウェイは、大分県佐伯市蒲江から県境をまたいで宮崎県延岡市北浦町まで海沿いまでの国道三八八号を中心とする総延長約九六キロメートルの長細いルートである。一般的なシーニック・バイウェイに比較すると、そのエリアは必ずしも大きくはないが、いわゆる見所・観光スポットが少ないわけではない。

日豊海岸でのシーニック・バイウェイ研究会は、先述した女性の会の方々を中心として二五の団体が構成され、「浦（迎え入れる人里）ごとにある海業（持続的な漁業）の連携で、質の高い道路空間づくりをととした地域振興」のために、『地域の資源の発掘と有効利用』『海の道』のリフォーム』『県境を越えた地域連携と情報発信』の三つの活動方針を掲げて活動されている。三つの活動方針の下で展開されている地域の活動は、この地を訪れる人々へのおもてなしの代表格である。

### ●あまべ渡世大学

蒲江地区全域を“キャンパス”として“開講”されている「あまべ渡世（とせい）大学」は、活動方針1の「地域の資源の発掘と有効利用」の下で展開される、地元の方々とふれあいながら地域を楽しみ・学ぶことのできる、これぞシーニック・バイウェイ型観光といえるプログラムである（写真28）。「渡世」は地元の漁師がよく使う言葉で「生き方・生業（なりわい）」のこと。その生き方・生業を、地元の人々との交流を楽しみながら体験できるメニューがそろっている。

（写真29、30）



写真28 あまべ渡世大学パンフレット



写真29、30 ウニ割体験やシーカヤック体験

たとえば、ウニの中身を取って食べる「ウニ割体験」、漁船に乗ってブリやカンパチの養殖場に行き、養殖の話が聞ける「沖合養殖体験」の他、「伊勢えびのさばき方講座」「体験セーリング」「シーカヤック体験」「真珠アクセサリー作り体験」など、体験メニューは多彩。また、蒲江の伝統料理を味わえる「おばちゃんバイキング」もある。これらの講師はすべて個性豊かな地元の方々。人生経験豊かな講師の方々とのふれあいは、きっと心に残るだろう。カップルや家族連れも、老若男女誰でも楽しめるので、是非体験して欲しい。なお、これらの体験には事前予約が必要のため、まずは「NPO法人かまえブルーツーリズム研究会」（〇九七二―四二―〇一一五）に連絡して、詳細を確認して欲しい。

#### コラム NPO法人かまえブルーツーリズム研究会

「NPO法人かまえブルーツーリズム研究会」は、蒲江地区の漁業者、水産加工業者、女性団体、環境団体、地域づくり団体など様々な団体の代表者が集まって平成一八年に設立され、平成二〇年にNPO法人となった組織である。活動目的は、「地域に伝わる伝統に裏打ちされた浦辺の生業を継承するとともに、今に伝わる海を生業とした暮らしを活かした体験型観光を通じて交流人口を増やすこと」。それまで「陸の孤島」とも呼ばれていた状況が東九州自動車道の開通によって解消されても、蒲江地区に魅力が無ければ素通りされてしまうという危機感から、地域の人たちが活動を始めた。中心となったのは先述の「蒲江道づくりを考える女性の会」のリーダーとメンバー達。蒲江は女性パワーのまちである。

後述する「東九州伊勢えび海道」の仕掛けもブルーツーリズム研究会が中心となって始まったものである。



写真31、32 東九州伊勢えび海道と日豊海岸岩ガキまつり

種々の伊勢えび料理が堪能できる。獲れたて新鮮な伊勢えびは、海の香り豊かな味わいがあり、刺身や塩焼き、味噌汁などのシンプルな料理がお勧めだが、微妙な調理加減は店ごとに異なる。何度もお通ってご贖いのお店を探すのもおもしろい。参加店、関連イベントやプレゼント等の情報に

●「東九州伊勢えび海道」と「日豊海岸岩ガキまつり」  
日豊海岸でのシーニック・バイウエイ研究会の活動方針「県境を越えた地域連携と情報発信」を実現している代表的な活動が、「東九州伊勢えび海道」（写真31）祭りである。大分県佐伯市と宮崎県延岡市の海道筋の食事処約三〇店舗で、伊勢えび漁の解禁となる九月初めから一ヶ月末の三ヶ月間、「東九州伊勢えび海道」と銘打って、

ついでには毎年更新されるので、出かける前にはHPをチェックして欲しい。  
ちなみに、このイベントも当初は「かまえばルート」ツアー研究会が蒲江地区で仕掛けたものだが、それが東九州自動車道の開通にともなって佐伯市、延岡市全域で開催されるイベントに発展した。ちなみに高速道路の開通効果はめざましく、多くの観光客を広域的に呼び込めるようになり、平成二四年から平成二六年で売り上げが一・五倍も増している。高速道路は広域的に観光客を呼べるようになったとともに、佐伯市と延岡市の広域的連携を促進・強化していると言える。

さて、伊勢えび海道祭りは、晩秋から初冬にかけてのイベントであるが、春から夏にかけては新たな広域連携イベント「日豊海岸岩ガキまつり」（写真32）がある。

通常のカキは冬が旬であるが、岩ガキは春から夏に旬を迎える。特に日豊海岸の岩ガキは、黒潮からのミネラル豊富な海水と、山々から流れ出したミネラル豊富な雨水によって、一般の岩ガキと比べ、大粒で濃厚・クリーミーな味わいになるのが特徴とのこと。

こちらのイベントは、宮崎県の日向市、門川町と延岡市の三市町で構成されるひむか日豊海岸観光推進協議会と、佐伯市観光協会が、平成二八年度に初めて企画。高速道路の開通を食を通じた観光振興につなげようとする動きが活発になってきた。

日向市、門川町では四月から、延岡市では五月から、そして佐伯

市内では六月から岩ガキが提供される。まさに「岩ガキ前線の北上」である。平成二八年の開催加盟店は全部で二一店舗。開催期間中は、抽選で豪華賞品が当たるスタンプリーもある。こちらのイベントも、それぞれの市町の観光協会あるいはイベントHPで確認して情報を入力してから訪れていただきたい。情報は常に更新されるので、旅を一層楽しむためには、最新の情報を事前に入手されることをお勧めする。

#### コラム 東九州バスケット化構想

平成二八年五月に延岡市、佐伯市の両市長が「東九州バスケット化宣言」を共同で行った。バスケットはフランスとスペインにまたがる地方で、世界一の美食の街と言われるサン・セバスチャンを擁し、「食材の宝庫」と言われる。東九州バスケット化構想は、このバスケット地方をヒントに、海・山・川の食材が豊富な延岡市と佐伯市が、「食」「連携」をキーワードに、新たな経済・文化圏を作ることを目指す。両市の行政、経済界、観光協会が東九州自動車道の開通を契機に広域的に連携して地域プロモーションを行う取り組みである。

「大地からテーブルへ、海から皿へ」「美食とはおいしく食べる美しさ」「美食が人を集わせる」「料理人の聖地へ」「美食はやがて産業となる」の五つのコンセプトをもとに、シンポジウムなどのイベント開催、六次産業化や大学との連携、農林水産物の成長、高付加価値化、飲食店の創業、経営基盤の強化、地元素材を活用した新商品開発、観光旅行商品の造成や観光客誘客、ブランド化、販路開拓などの事業が今後展開されていく予定である。

具体的にどのような事業が展開されるかは今のところ未知数であるが、これらの取り組みが今後の日豊海岸シーニック・バイウェイの観光資源になっていくことを十分に期待したい。また、「バスケット化構想」はこれから多くのイベント・催しを実施するはずなので、この地域を訪れる際には、是非、インターネットで旬な情報を得ることをお勧めしたい。

●魅力的な沿道景観の演出

日豊海岸でのシーニック・バイウェイ研究会の活動方針「海の道のリフォーム」は、前二者と比べて地道であるが、豊かな海や自然の景観を沿道から楽しめるように、地域の方々によって、雑草伐採や、道路の清掃活動、草花の植栽運動が展開されている。また、海岸美を損なわないために看板等の整理や、駐車場（とるば）、休憩所（ベンチ等）の整備も逐次、行われているところである。

その代表例として里の駅「たかひら展望公園」を挙げておこう（写真33）。この公園は秋の風物詩「のじぎく」が有名であるが、一時は鹿の食害や連作障害等で壊滅状態になっていた。そこで平成二二

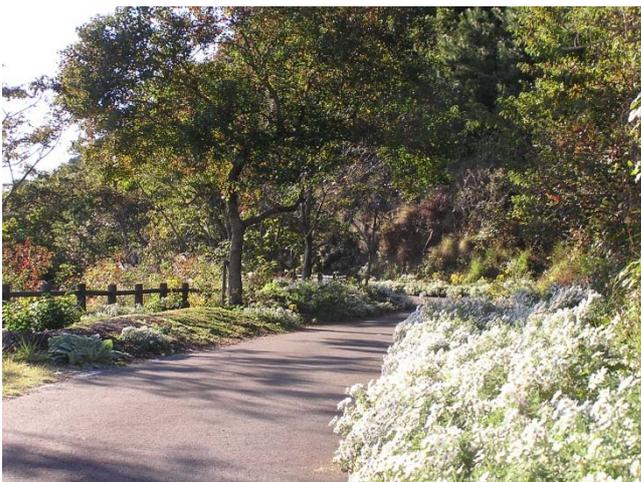


写真33 高平のじぎく

年から日豊海岸シーニック・バイウェイの官民パートナーシップによって、鹿防止ネットの設置や早朝からの草取り・水やり、ビニールハウスでの育苗等がなされ、現在では毎年一月から二月上旬まで、多くのノジギクが来訪者を楽しませている。花一杯の公園、見晴らしの良い展望台、車窓か

ら海や山の眺め……。この背景には多くの地元の方々との地道な活動があることに思いをはせながらこのような風景を見れば、その感動はひとしおのものとなるだろう。

その他、北浦地区ではきたうら風景海道推進協議会主催で、春に「下阿蘇ビーチ遊歩道清掃」が、夏に「下阿蘇ビーチ一斉清掃」が、多くのボランティアの方々参加を得て実施されている。

六 日豊海岸シーニック・バイウェイを巡るエリア別の見所紹介

冒頭で述べたように、日豊海岸シーニック・バイウェイは、大分県佐伯市蒲江から県境をまたいで宮崎県延岡市北浦町まで海沿いまでの国道三八八号を中心とする総延長約九六キロメートルの長細いルートである。したがって、日豊海岸シーニック・バイウェイを巡るには、国道三八八号を南下あるいは北上し、目的地を順に辿ってゆけば良い。東九州自動車道を利用する際も、エリア内のインターチェンジを降りてから国道三八八号を辿るか、あるいはそのインターチェンジ周辺地区で観光した後、高速道路に戻ってまた次のインターチェンジで降りる形となる。すなわち、観光周遊は北から南、あるいは南から北に順に目的地を辿ることが基本となる。

先ほどは、イチオシということでエリアや道順にこだわらず、三つのお勧め体験を紹介したので、ここでは蒲江エリア、北浦エリアについて、それぞれ佐伯方面から南下、延岡方面から北上する形で、おすすめの場所や体験メニューを紹介しておこう。

## 1 蒲江エリア

・空の公園・空の展望所（写真34、35）

日豊海岸シーニック・バイウェイのエリアの北端には、「空の公園」と「空の展望所」がある。佐伯市からは国道三八八号を南下し、海沿いに米水津と蒲江を結ぶ豊後くろしおラインに入ると峠の先にこの二つがある。

「空の公園」は標高一六〇メートルのところにあつて、眼下に太平洋を見渡すことができ、よく晴れた日には遠く四国の山々まで見ることが出来る。また、公園内にはツツジと桜が植えられ、ファミリーでの春のピクニックにお勧めである。



写真34 空の公園



写真35 空の展望所

また空の公園からは、遊歩道で標高二八二・五メートルの瀬平山にある展望台や空の地蔵尊に行くことができる。岬や島々が海に浮かぶ雄大な風景や、眼下の湾に広がる港や養殖の風景は訪れる人の評判も高く、特に元日は初日の出を拝む人々で混雑するほどの人気スポットである。

・あまべ渡世大学

先述したので、ここでは簡単に触れるのみにしておくが、国道三八八号を豊後黒潮ラインとの分岐点からさらに南下し、入津トンネル、愛宕トンネル、小浦ヶ浜トンネルを抜けると道路は海沿いを走ることになる。車窓から見えるのは入津湾である。この入津湾沿いにあまべ渡世大学の多様な体験講座の教室が展開している。事前に連絡が必要だが、余所ではできない体験メニューが盛りだくさんである。事前の予約をして是非、訪れてみていただきたい。

・蒲江海の資料館

国道三八八号を豊後黒潮ラインとの分岐点からさらに南下し、入津トンネル、愛宕トンネル、小浦ヶ浜トンネルを抜けると入津湾岸沿いをしばらく走り、県道六八七号から西野浦方面に向かうと直ぐに「蒲江海の資料館」が海沿いに佇んでいる。（写真36）

海の資料館には、蒲江の漁師が使っていた伝統のある船舶（網舟）や「チャンネル船」と呼ばれる）や、漁撈用具（魚類や貝類を捕る道具や作業道具）、網漁具、一本釣り具や延縄釣り具、運搬具、加工用具、照明具などが、その数約二万六千点と圧倒的な量で収納・展示



写真36 海の資料館(外観)



写真37 海の資料館(内観)

されている。そのうち五  
一五点は  
「蒲江の漁  
具」として  
昭和五三年  
に大分県有  
形民俗文化  
財に、平成  
六年に国の  
重要有形民  
俗文化財に  
指定されて

展示室の真ん中にあるが、杉材でできた大きな階段兼ベンチを上がつていくと、船をそれぞれの高さで見ることができ、また展示室全体も一望のものとなる。とても気持ちの良い空間である。

・里の駅たかひら展望公園と仙崎つつじ公園

国道三八八号と西野浦方面に向かう県道六八七号の交差点を、そのまま国道三八八号を南下し、高山トンネルの直前から里の駅「たかひら展望公園」に上ることができ(ちなみに先述の「シン垣」は、展望公園に至る山中の道から見ることができるので、探してみたい)。

比較的急な道を上り詰めると、そこは標高二八〇メートルの公園である。ここからはリアス式海岸の海を一望でき、天気がよければ四国の山々も見渡せる(写真38)。

また、「仙崎つつじ公園」は、西野浦地区から直接車で上ることができ、たかひら展望公園とは峰続きで、サイクリングロード、遊歩道で行くこともできる。両公園を結ぶサイクリングロード・遊歩道沿いに



写真38 四国の山々

おり、文化的価値も高い。(写真37)

さて、ともすればこのような資料の展示はどちらかと言えばマニアックな感じで敷居が高いかも知れないが、事前の知識や格段の興味が無くても比較的楽しめるのではなからうか。その秘密は建物と展示の仕方にある。設計は地元出身の建築家の手による。

この建物は、廃校となった小学校の体育館を再利用したもので、体育館全体が外側からシックな壁と屋根ですっぽりと覆われる構造になっている。小さな港のそばに佇むその姿はなかなか美しい。

そして内部空間は、床や壁に杉材がふんだんに使われており、広々としていながら暖かく、穏やかな気持ちにさせられる。大きな船が



写真39 仙崎つつじ公園

は「のじぎく」が植栽され、また仙崎つつじ公園には文字どおりフジツツジが群生している。色鮮やかな花と、海の青さ、空の青さ、そして海に広がる岬や島の風景を楽しみながらのサイクリングや散策はまた格別であろう。(写真39)

なお、たかひら展望公園には、「高平キャンプ場」が併設されている。ケビン三棟のほかテントサイトもあり、さらに管理棟には簡単な食事もできるほか売店もあり、炊事用具セットの貸出しや薪・炭の販売もあるため、初心者やファミリーでも安心して宿泊、デイキャンプを楽しめよう。

・マリナルチャーセンターと元猿海岸

国道三八八号の高山トンネルの蒲江側（北浦・延岡側）を出て直ぐに左折すると、元猿海岸が広がる。この海岸沿いに岬の先端に向かう途中にあるマリナルチャーセンターは、日豊海岸シーニック・バイウェイのエリアの中で随一の総合レジャー拠点施設と云って良いだろう（写真40）。この施設は、大分県策定のマリノポリス計画における海洋レジャー観光推進部門の中核的施設として平成4

年に開館したものである。

フィッシングやカヌーのようなマリナレジャーのみならず、ウォーキング、朝市、干物づくり体験、あるいは卓球大会など多彩なイベントを常に繰り出して一般の観光客を受け入れるレジャー施設でもあり、学校などを対象とした合宿を受け入れる教育施設でもある（イベントの一部は、あまべ渡世大学の講座でもあ

る）。もちろん、一般客を対象とした宿泊施設も整っているし、蒲江の魚介類をふんだんに使った料理を提供するレストランも併設されている。いわば、なんでもありである。

一般の訪問客としては、ここで開催される数々のイベントを楽しむことができる。この施設の魅力であるが、それにも負けず劣らずの特筆すべき魅力を二つ、紹介しておきたい。

一つ目は「マリカルといえはマンボウ」というほど周辺の人々に親しまれている「マンボウの飼育展示」である（写真41）。マンボウは春の使者とも呼ばれるが、二月下旬頃に黒潮にのって北上し、



写真40 マリナルチャーセンター



写真41 マンボウの飼育展示

蒲江にやってきて定置網にかかったものを、毎年マリナルチャーセンターが引き取って海水プールで飼育している。エサやり体験ができるので子供達にも人気であるが、とぼけた顔つきでのんびりと泳ぐ姿は大人にとっても癒やし効果の期待大である。

二つめは「サンゴ鑑賞」である。マリナルチャーセンターからは、湾内と、深島・屋形島に向かう二種のサンゴ鑑賞コースがあり、前者では小型の伝馬船に乗って湾内を周遊し、箱めがねでサンゴを鑑賞できる。後者では比較的大きなグラスボート「マリニコール号」で沖合に出て、テーブル珊瑚の群生を楽しむことができる。ちなみにマリニコール号は貸し切りクルージングや定置網漁見学も可能であるため、海の魅力を十分に体験してみたい。

ところで、マリナルチャーセンターの手前に広がる元猿海岸、高山海岸もなかなか気持ちの良い場所である。元猿海岸の砂浜は、幅は約四〇メートルと広くはないが、長さは約一キロメートルあり、



写真42、43 上：元猿海岸  
下：高山海岸

また高山海岸部もあわせると長さは三・二キロメートルにも及ぶ、大分県下でも有数の海水浴場である（写真42、43）。特に元猿海岸は、稀少な海浜植物であるグンバイヒルガオやハマユウが群生し、ウミガメが産卵するなど、豊かな自然に恵まれているとともに、サーフィンやボディボード、魚釣りのスポットとしても有名で、日本の渚百選にも選定されている。海岸には、駐車場、トイレ、炊事場、シャワーがあるので家族連れでも楽しめやすいだろう。

冒頭にも述べたが、どことなくヒューマンスケールのリアス式海岸の風景は美しい。そしてこの海岸からの夕日はまた格別である。

・葛原海水浴場と波当津海水浴場

蒲江インターチェンジから海沿いを延岡方面に向かうと山側に入る国道三八八号と海側を行く県道一二二号が分岐する。この県道一二二号を少し進むと見えてくるのが、葛原（かずらはら）海水浴場と、波当津（はとうづ）海水浴場である。

葛原海水浴場は、県道側から小さな葛原集落を抜けると直ぐに目の前に広がる弓なりの砂浜海岸である。ここにはトイレ・シャワー施設はあるものの、駐車場が整備されていないので注意が必要。逆に言えば、大勢のレジャー客でひしめき合うことがなく、のんびりと過ごすには格好の場所でもある。時計で言えば、海に向かって前方一時から一時方向のみが水平線で外洋に向かっていているが、このりの海側の方向は全て岬や山である。緑に囲まれた砂浜は波静かかつ遠浅で、気持ちよく時間を過ごすことができるだろう。

波当津海水浴場も、遠浅で波静かで家族連れでの海水浴によい。また、白砂と青松とのコントラストが美しく、(社)日本の松の緑を守る会により「日本の白砂青松一〇〇選」に選ばれ、さらにハマユウの群生や、ウミガメの産卵など自然の魅力を身近に感じることができらるだろう。こちらの方は、葛原海水浴場よりも少し大きく、駐車場、シャワー・トイレ、休憩所もある。海岸部の松林はキャンプ場になっており、テントだけでなくオートキャンプも可能で、特に夏の海水浴シーズンに家族づれや団体で、比較的簡単に楽しむことができる。

## 2 北浦エリア（「ひむか遊パークうみウララ」エリア）

観光系の資料やマップ等では、「ひむか遊パークうみウララ」の名称が目につく。これは、東九州自動車道・北浦IC（須美江IC沿いの日豊海岸国定公園内に位置する北浦・南浦（熊野江、須美江、浦城、安井）・島野浦周辺エリアを指す。このエリアは日豊海岸シーニック・バイウェイの宮崎県部分、すなわち本ガイドブックではこれまで大きく「北浦地域」と呼んでいたエリアそのものである。

「ひむか遊パークうみウララ」の名称は、延岡市が、東九州自動車道開通と日豊海岸国定公園指定四十周年を記念してこのエリアをリゾートパークとして位置づけ、地域の観光資源を積極的にPRし、観光客を集客しようとするために全国公募して決定されたもので、この名称のもとに、多様な地域振興・観光プロジェクトが官民間問わずに進められているところである。「ひむか遊パークうみウララ」の名称やロゴは、ここを訪れればいたるところで目にする事ができる。

以下では、延岡方面から北上するかたちで、北浦エリアのおすすめの場所とその位置関係を整理していこう。

延岡市方面から北浦エリアに入るには、北川を渡った後に、そのまま国道三八八号で内陸側から直接に浦城町に入るルートと、右折して県道一二二号で海に沿って進み、白浜海岸を通って浦城町に入るルートがある。浦城町でこの二つのルートは一旦合流するがまた

海沿いと内陸に分かれ、内陸側の国道三八八号では直接、須美江家族旅行村・海水浴場に出て、その後、熊野江海水浴場と道の駅きたうら・下阿蘇ビーチ・浜木綿（はまゆう）村を抜けて北浦町の中心部に至り、北浦インターチェンジの側を通って蒲江エリアに入っていく。海沿いの道は日豊リアスラインと呼ばれ、浦城海岸、七ツ島展望所を経由して須美江海水浴場近辺でまた国道三八八号に合流しする。

なお、先に「自然と人が織りなす生業（なりわい）の風景」の項で紹介した「地下（じげ）地区の茶畑」は、北浦IC近辺から農免道路を経由して山間部に入った場所であり、また「蒲江・北浦地域内での移動」の項で触れた横島展望台は北浦町の中心部から県道一二二号に入り、峠越えをした場所にある。これらについては、改めてここで記すことはしないので、前出の項を読み返していただきたい。

#### 〈海水浴場と美しい砂浜海岸〉

上述のように、北浦エリアには海水浴場がいくつもあるが、比較的規模が大きく、かつ多様な施設が整っているのは、須美江家族旅行村・海水浴場と、下阿蘇ビーチ・浜木綿村の二ヶ所である。

#### ・須美江海水浴場と家族旅行村（写真44）

須美江海水浴場は、南の烏帽子礁に連なる半島と北の須美江鼻に囲まれた須怒江湾の一角にある砂浜で「日本の水浴場八八選」にも選ばれている。宮崎県内の海水浴場の中で最も波が穏やかな遠浅の

砂浜であるため、小さな子ども連れでも安心して海水浴を楽しむことができる。夏の海水浴シーズンには多くのファミリー層で賑わう。

また、海水浴場に隣接する須美江家族旅行村には、大型すべり台、草スキー、バーベキュー、テニスコート等がある「ビーチの森すみえ」や、五ヶ瀬川水系の淡水魚や、日向灘の珍しい魚などが展示されている「すみえファミリー水族館」、さらに宿泊施設として、冷暖房完備のケビンやオートキャンプ場があり、海水浴場とあわせて、小さな子供連れのファミリーでも安心して多様に楽しめる滞在型総合レジャー施設となっている。

なお、須美江海水浴場からは少し離れているが、国道三八八号の「ビーチの森すみえ」の入り口近辺から、「日豊リアスライン」で南下して海岸沿いの山道を登れば、そこに七ツ島展望所がある。ここからは須美江海水浴場を含むリアス式海岸の壮麗な日豊海岸国定公園を一望できる。空の青と海の青、それに島々の緑、砂浜の白が立体的に組み入った大きな風景は一見の価値がある。なお、敷地には若山牧水の歌碑がある、また展望所へ通じる道沿いには桜の木も多くあるため、それを目当てに訪れるのも良いだろう。



写真44 家族旅行村

・下阿蘇ビーチと浜木綿村(写真45)



写真45 浜木綿村

種に指定されている「グンバイヒルガオ」が自生していて、夏には薄紫色の花を咲かせる。

下阿蘇ビーチに隣接している「浜木綿(はまゆう)村」は、ケビン・オートキャンプ場・常設テントなど宿泊施設、河川プール・パークゴルフ場・テニスコートなど家族で楽しめるレジャー施設、さらには、北浦の特産品を備えた「道の駅北浦」や「海のレストラン海鮮館」、塩づくり見学ができる「塩田」などもある、比較的規模の大きな滞在型レジャー施設である。宿泊の際には、バーベキューセットは浜木綿村でレンタルし、新鮮な地元の食材を道の駅で調達すると楽しそうである。もちろん、レストランで食事しても良い。海

下阿蘇ビーチは、環境省が定める快水浴場百選の「特選Ⅱ九州」に選定された美しいビーチである。足下には美しい白砂が広がり、

正面には島浦島をはじめとした小島が点々と浮かぶそのさまは、「日向松島」とも呼ばれるほど美しい。また、海岸自体が湾内にあつて遠浅かつ波が非常に穏やかなため、小さな子供連れでも安心して海水浴を楽しむことができる。なお、浜辺には県の絶滅危惧

水浴だけでなく、家族やグループで何日か滞在しながら気軽にアウトドアレジャーを楽しむには格好の場所であろう。

・熊野江海水浴場と浦城海岸

先の二つの海水浴場は、各種施設が充実した総合型のレジャー拠点であるが、熊野江海水浴場は、駐車場が無く、小さな更衣室・トイレ・シャワーがある程度の小さな海水浴場で、浦城海岸は、かつては海水浴場であったが現在は美しい砂浜空間として親しまれている海岸である。いずれも多くのお客様を受け入れることはできないため、主に地元の方々が楽しめる場所になっているようであるが、自然の美しさを十分に堪能できる場所として紹介しておきたい。

熊野江海水浴場は、波のおだやかな内湾に面していて遠くの岬や小島で囲まれた八〇メートルにも及ぶ美しい白浜と松林が続く海岸である。水の透明度が高いことでも有名であるが、海水浴客は少ないため、プライベートビーチのような雰囲気味わえよう。また、海水浴場西側には、ハングラライダーやパラグラライダーの愛好家で賑わう鏡山が見え、時折、空を自由に舞う姿も見られる。

浦城海岸も、周りを岬や小島で囲まれた穏やかな海岸で、エメラルドグリーンに輝く透き通った遠浅の海と白い砂浜が特徴である。ここもまた行楽客は少なく、プライベートビーチ感あふれる海岸であるが、静かな砂浜から、遠くに島の浦に渡るフェリーを見ながら、のんびりと時間を過ごすには格好の場所であろう。

・白浜海岸

よほど車の運転に慣れた方にはしかお勧めできないが、人の手のほとんど入っていない「秘境」的な海岸が浦城地区の南側にある。延岡側からは、国道三八八号から県道二一二号に入って道なりに進めば到着するが、道が必ずしも良くないため、浦城町側から入った方が良い。この場合、浦城町から車一台分の幅の県道二一二号（浦城東海線）を南下して、ひと山越えれば白浜海岸である。

人里離れた海岸は遠浅で透明度が高く、太陽が反射して輝く水面と、海岸を囲い込む豊かな自然とが視野に拡がり、幻想的な景色が展開する。加えて、ここに至る道が険しいため、訪れる人もさほど多くない。

車の離合が得意でない方にはお勧めしない。しかし、マニアックではあるが、美しい景色を静かに楽しみたいならば、訪れる価値はあろう。

〈今も地域の方々から大切にされている文化遺産〉

北浦エリアでも蒲江エリアでも、もちろん多くの寺社仏閣があり、それぞれに長い歴史を持っているが、観光客の見所となっているようなものは多くはない。このため本ガイドブックでもこれまでそれらに特段触れなかったが、ここでは北浦エリアで大切に受け継がれ今の地域の方々の生活にも根付いている、地域生活文化を象徴する文化遺産を二つ紹介しておきたい。

・宮野浦八十八ヶ所（写真46）

北浦の町から遠見山の半島の先に向けて少し走ると宮野浦地区があり、この宮野浦地区を発着点として半島の先をまわる形で八十八の石仏が安置されている。これが宮野浦八十八ヶ所である。由来は、江戸後期（文政期）に宮野浦地区で疫病や火事が続いたため、交易で富を得た宮野浦の中野忠之丞の発願で四国霊場八十八ヶ所を勧請したとされている。

遍路のスタートとなる一番札所は、集落の入り口にある高さ約五メートルの「修行大師」で、遍路道は全長約十二キロメートル、標高差約二〇〇メートルある。各大師像はそれぞれ世話をする家が決まっており平素でもお花が添えられている。また、遍路道も地区の人々により整備されている。

毎年旧暦の三月二日には「宮野浦八十八ヶ所大師祭（お大師さん）」が行われ、市内外から白衣に袈裟姿をした大勢の「お遍路さん」が詰めかける。大師祭時には遍路道の途中、数ヶ所で地区の方々によるお接待がもたれ、赤飯やひじき、お酒、お茶などが振る舞われる。

過疎化が進む中ではあるが、地区の方々はこのような場所と習慣を大切に守り続けている。全行程とは



写真46 宮野浦八十八ヶ所

いかないかもしれないが、いくつかの石仏を訪ねながら、昔より引き継がれる地区の人々の思いに心を巡らせてみたい。

#### ・島野浦西国三十三観音

浦城港と島野浦島（しまのうらしま）の間は、フェリーと高速艇が結んでおり、合わせて一日一六往復（平成二九年四月現在）が運航され、比較的便利な島である。

島内にそびえる遠見場山（一八六メートル）の尾根づたいには、約一〇〇メートル間隔で三十三体の石造りの観音像が安置され、「島野浦西国三十三観音」と呼ばれる。

由来は、全国的に大飢饉で多くの餓死者や疫病が蔓延し、全国的に一揆や打ちこわしが多発した時代の最中である天保一二年（一八四一年）に、近畿六府県と岐阜県にある西国三十三ヶ所をもとにつくられたものとされる。それぞれの観音像には本尊のあるお寺と寄進者の名前が刻まれているが、現在でも毎年三月の遠見場山祭の際には、施主の子孫がそれぞれの観音像をきれいに洗い清めている。

祭り以外の日でも、多くの「島野浦西国三十三観音巡り」が定期的に訪れているとのことである。約四時間のコースであるが、途中にはいくつもの絶景ポイントもあるので、お勧めのトレッキングコースでもある。ちなみに島野浦西国三十三観音は、平成二十一年に、「国土交通省都市・地域整備局」主催による「島の宝一〇〇景」に選出されている。

### 3 初心者でも楽しめるマリンスポーツ

蒲江・北浦エリアの豊かな海は、訪れるものに多様な楽しみ方を与えてくれる。風景を楽しみながらの散策や、あるいは海水浴やキャンプなどについては、誰でも比較的簡単にできるレジャーであるが、釣りやダイビングなどのマリンスポーツは、未経験者には敷居が高いかもしれない。日豊海岸シーニック・バイウェイは、未経験者・初心者でもこれらのスポーツ・レジャーを気軽に体験できるので、是非試してみたい。

#### ・あまべ渡世大学とマリカルチャーセンター

あまべ渡世大学では、ヨットセーリング、シーカヤック、地引き網、船釣り、釣り堀などの体験メニューを用意している。また、マリカルチャーセンターでも先述のサンゴ観察やクルージングのほか、カヌー、カッター、ダイビングの体験ができる。

#### ・かまえ海上釣り堀 釣っちや王

蒲江ICから降りて国道三八八号を延岡方面に向かうと直ぐの場所にある海上釣り堀が、「釣っちや王」である。海上に木製の筏を浮かべ、そこに網で仕切られた生け簀が並んでおり、生け簀の中にはマダイ、カンパチ、ブリ、シマアジ、マハタ、ヒラマサ等々の高級魚が泳いでいる。

釣り道具は持参しても良いが、ライフジャケットも含め、レンタルもできる。釣果を持ち帰るクーラーボックスさえ持参すれば（ス

チロール箱も販売している)、ほぼ手ぶらで訪れても問題ない。定額釣り放題なので、高級魚を釣った分だけ持ち帰ることができるし、釣れないときにはお土産の魚がもらえるシステムになっている。

筏にはスタッフも常駐しているので、釣りに慣れない方のアドバースもしてくれるし、筏の上にはトイレも設置されており、子供でも女性でも安心して楽しめる。

・延岡観光協会・NPO法人ひむか感動体験ワールド

延岡市がわでのマリンスポーツ体験については、延岡観光協会とNPO法人ひむか感動体験ワールドが連携して、多様なメニューを提供している。ちなみにNPO法人ひむか感動体験ワールドは、さまざまなフィールドで来訪者に本物の感動体験を案内できる、スベシヤリストを集めたNPO法人である。両者は、海だけでなく山や川を舞台にした体験メニューを多様に用意しているので、興味があればホームページを開いてみて欲しい。

ちなみに用意されているマリンスポーツ体験メニューは、クルージング、シーカヤック、ビーチシュノーケリング、スキューバダイビング、ボディボード、サーフィン、クロ釣り、定置網等々。アウトドアの達人がインストラクターあるいはガイドとなってサポートしてくれるので初心者でも安全に楽しむことができるだろう。必要な機材・道具については基本的に用意されているので、気軽に申し込んでみよう。

・より深く楽しむために

クルージング、釣り、サーフィン、ダイビングなどのマリンスポーツの上級者の方々はそれぞれ独自のネットワークと情報をもたれているだろうし、それぞれの専門雑誌やインターネットをみれば、ショップやガイドの情報が常に更新されて掲載されているため、ここであえてガイド情報をリストアップする必要はないだろう。

アウトドアスポーツは奥深く、技術的な上達により楽しみ方が多様になる一方で、場合によっては危険と隣り合わせのレジャーであるため、是非、地域のショップやガイドを積極的に活用してほしい。

## 七 道の駅等の観光拠点について

道の駅はいまや全国いたるところに設置され、それぞれがドライブ観光の拠点となっている。ご当地のみやげもの販売や地元食材を使ったレストラン等の飲食はもとより、近隣の観光情報やイベント・祭り情報提供もあり、施設によっては対面の観光案内もある。近年では無料の無線LAN整備も進み、情報拠点としての利便性が一層高まっている。

また、道の駅のほかに、農業系、漁業系などの地元の民間組織による観光拠点施設の整備も進んでおり、地元の地域づくりに貢献すると共に、訪れる方々に利便を提供している。



写真47、48 上：道の駅かまえ  
下：道の駅北浦

日豊海岸シーニック・バイウェイのエリア内の道の駅は、表2に示すように大分県側で「道の駅かまえ」(写真47)が、宮崎県側で「道の駅北浦」(写真48)「道の駅北川はゆま」がある。また、民間拠点施設としては蒲江インターの直ぐ近くに「かまえインターパーク海辺の市」が、北浦インターの直ぐ近くに「北浦臨海パークきとうらら海市場」がある。

いずれも比較的大きなレストランと直売所を備え、豊富な魚介類をはじめとした地元産品を販売しているほか、レストランでは新鮮な海の幸を味わうことができる。駐車場も広く、施設の敷地も大きいので、買い物・食事だけでなく、ドライブの気分転換やのんびりと休憩するだけでも使いやすい施設である。

表2 日豊海岸シーニックバイウェイのエリア内の道の駅

<b>道の駅かまえ</b>	国道388号線沿い	0972-42-0050	大分県佐伯市蒲江大字蒲江浦5104番地1
○提供エリア及び提供時間	「インフォメーションコーナー」 9:00～18:00		
○情報提供機器	情報端末(1台)、 掲示板		
○情報提供内容	[道路情報および近隣の「道の駅」情報] ルート情報を案内人、情報端末、掲示板、チラシで提供 [観光情報] 駅周辺の観光施設情報を案内人、情報端末、掲示板、チラシで提供 [医療情報] 医療情報を案内人、掲示板、チラシで提供 [他の「道の駅」の情報] 案内人、情報端末、チラシで提供 [その他情報] 気象情報を情報端末で、災害情報を掲示板で提供		
<b>道の駅北川はゆま</b>	国道10号線沿い	0982-24-6006	宮崎県延岡市北川町長井5751-1
○提供エリア及び提供時間	テイクアウトコーナー 8:30～18:00		
○情報提供機器	大型画面 故障中		
○情報提供内容	[道路情報および近隣の「道の駅」情報] ルート情報を掲示板、地図・チラシで提供 [観光情報] 駅周辺の観光施設情報を、掲示板、チラシで提供 [医療情報] 医療情報を掲示板で提供 [他の「道の駅」の情報] 施設の内容を情報端末で提供 [その他情報] 高速道路の工事・渋滞情報を、テイクアウトコーナーの大型画面にて情報提供 8:30～18:00		
<b>道の駅北浦</b>	国道388号線沿い	0982-45-3811	宮崎県延岡市北浦町古江3337-1
○提供エリア及び提供時間	「モニターロービー」「売店内情報コーナー」9:00～18:00		
○情報提供機器	情報端末 2台		
○情報提供内容	[道路情報および近隣の「道の駅」情報] ルート情報を地図・チラシで提供 [観光情報] 駅周辺の観光施設情報をチラシで提供 [医療情報] 医療情報を掲示板で提供 [他の「道の駅」の情報] 施設の内容、イベントをチラシで提供 [その他情報] なし		

表3 祭り・イベント

月	祭り、イベント	開催地	問い合わせ先
1	八日薬師祭	東光寺	蒲江振興局(0972-42-1111)
3	高平山絶景ウォーク大会 ～春のマンボウウォーキング～	大分県マリカルチャーセンター	大分県マリカルチャーセンター(0972-42-1311)
4	仙崎公園つつじ祭り	仙崎公園	蒲江振興局 地域振興課(0972-42-1111)
5	マンボウフェスタ 万室かぐら祭り	大分県マリカルチャーセンター 大分県マリカルチャーセンター	大分県マリカルチャーセンター(0972-42-1311) 蒲江振興局地域振興課(0972-42-1112)
7	下阿蘇海岸外清掃活動 カキ祭り 御神幸祭(2年ごと)	道の駅北浦 北浦総合産業株式会社 道の駅かまえ かまえインターパーク など 早吸日女神社	延岡市北浦町古江3337-1(0982-45-3811) 佐伯市観光案内所(0972-23-3400) 蒲江振興局(0972-42-1111)
8	北浦納涼花火大会	延岡市北浦町古江港	きたうら納涼花火大会実行委員会事務局(0982-45-4238)
9	東九州伊勢えび海道(9～11月)	佐伯市・延岡市	延岡観光協会(0982-29-2155) 大分県佐伯市観光案内所(0972-23-3400)
10	浦の市蒲江まるかじりフェア 海鮮!山鮮!きたうら市! 延岡感動体験博覧会「えんぱく」(10～11月)	大分県漁協蒲江支店荷捌所 延岡市北浦町 古浦新港荷捌所 延岡市	道の駅かまえ(0972-42-0050) 北浦総合支所(0982-45-4238) えんぱく実行委員会(0982-20-0008)
11	のじぎく祭り 高平山絶景ウォーク大会 ～秋ののじぎくウォーキング～ 霜月祭り(神楽)	佐伯市蒲江たかひら展望公園 大分県マリカルチャーセンター 市振神社	里の駅たかひら展望公園(0972-42-1880) 大分県マリカルチャーセンター(0972-42-1311) 北浦町総合支所地域振興課(0982-45-4233)

### 八 蒲江・北浦地域の祭り・ホテル・観光情報など

#### 1 祭りなど

表3に、蒲江・北浦両地域の祭り、イベント情報のリストを示しておく。両地域共に神社や寺を中心とした歴史的な祭りはあるものの、比較的小規模なものが多い。ここでは、比較的大きな祭りとして蒲江地区西野浦にある早吸日女神社の大祭である御神幸祭と、先述の北浦地域での宮野浦八ヶ所大師祭を挙げておこう。

御神幸祭は、二年ごとの七月下旬に行われる。御神幸祭で演舞される八人太鼓及び獅子舞は県の無形民俗文化財に指定されている。御神幸祭では、

三基の神輿が本殿から約一・二キロメートル離れた御旅所へ向かって御幸するが、それぞれに八人太鼓組が付き、神輿に従って演舞を行う。神輿同士が出会うと、神輿をぶつけ合うけんか神輿が行われる。ただし、近年では神輿の担ぎ手不足のために、御神幸祭が開かれていない年もあったため、事前に確認される方が良かったろう。

宮野浦八ヶ所大師祭は、北浦町宮野浦地区で毎年旧暦の三月二日に開かれている。巡礼者が八八体の大師像がある約一二キロメートルの山道を四〜五時間かけて巡礼するが、その途中、住民たちがお茶や赤飯をふるまう「お接待」が行われている。

その他、近年の観光イベントについては表に示すものが代表的であるが、蒲江・北浦地域の振興は官民挙げて熱心に行われているため、このほかにも小規模なイベントは数多い。さらに、今後も新たなイベントが生まれたり、これまでのイベントが変化したりということも十分に考えられるので、事前のリサーチをしていくことをお勧めしたい。

#### 2 ホテルなど

表4に、蒲江・北浦両地域のホテル・民宿等のリストを整理しておく。せっかく日豊海岸シーニック・バイウェイを訪れるのであれば、ぜひ、このエリア内に宿泊していただき、海の幸を中心とした地元の食事を楽しんでいただきたいし、是非、地元の方々とのふれあいも楽しんで欲しい。

表4 ホテル・民宿

エリア区分	ホテル等	電話
蒲江	民宿なるみ	0972-45-0232
	民宿先の家	0972-45-0557
	民宿あじあみ	0972-45-0030
	民宿山田	0972-45-0090
	海辺の宿潮騒	0972-45-0023
	清水マリン	0972-43-3887
	民宿清水マリンおかめ	0972-42-5839
	民宿まるに丸	0972-42-1600
	民宿しまんご	0972-42-0019
	大分県マリンカルチャーセンター	0972-42-1311
	旅館日豊	0972-42-0027
	民宿増田	0972-42-0443
	民宿いとう	0972-42-1815
	民宿三休	0972-44-0557
	海月旅館	0972-42-1991
	高平キャンプ場	0972-42-1880
	サロンド橋本	0972-42-1991
	丸二水産	0972-42-1600
	燦々	0972-43-3546
	ふかしま	0972-42-1568
北浦	竹田屋旅館	0972-43-3116
	山田商店	0972-45-0557
	さざれ石高島	0982-45-2268
	高平屋	0982-45-3191
	臨港	0982-45-3571

もちろん、「東九州伊勢えび海道」のようなイベントも含め、昼食を楽しむ食堂はこの地域に沢山展開している。これらについては、常に最新の情報マップが手に入るので、パンフレットやHPをチェックしてみたい。

なお、日豊海岸シーニック・バイウェイの入り口である大分県佐伯市および宮崎県延岡市の市街地部および周辺部には多くの宿泊施設がある。いずれも歴史豊かな街であり、また都市の魅力も兼ね備えているため、こちらでの観光と宿泊を組み合わせることも良いだ

ろう。

### 3 食・特産品など

#### ● 蒲江地域

なんと言っても海の幸で、生鮮から加工品まで幅広い。活魚では、養殖魚としてはブリ、カンパチ、マダイ、シマアジ、ヒラメが中心で、天然ではイサキ、アジ、マダイ、タチウオなどが店に並ぶ。もちろん、秋からは天然の伊勢えびのシーズンが始まる。養殖ヒラメは、エサに大分名産のカボスが使われており、「カボスヒラメ」のブランドで売り出し中である。

貝類では、全国トップクラスの出荷量を誇る赤、オレンジ、黄色、紫と色鮮やかな養殖の緋扇（ひおうぎ）貝や、最近では夏が旬の養殖岩ガキがお勧めである。もちろん干物も豊富で、アジ、イカ、カマスなどのほか、いりこやシラス、ちりめんも品数が多い。

また、道の駅や直売店にいくと目につくのが魚のすり身である。これは蒲江・北浦地域共通の郷土料理ともいえるが、アジやエソのすり身が丸いハンペンのような形やかまぼこのようなかたまりで売られている。すり身は油で揚げても焼いても、味噌汁、鍋物や吸い物にも合う。また、すり身いなりや魚の味がしっかりしておいしい上に、なかなか使い勝手がよい。その他の郷土料理としては、1匹丸ごと使ったアジの丸寿司も有名である。

菓子としては、ようかん餡をスポンジ生地で巻いた「うず巻」があり、昔から漁師のおやつとして親しまれている。

北浦地域ももちろん海産物が第一の特産品である。宮崎県や延岡市は魚介類のブランド化を推進しており、「うみウララ」のブランド魚として、「へべスぶり」「宮崎一口あわび浦の恵」「北浦灘アジ」「ひむか本サバ」「のべおか岩ガキ」、さらには「ほろ酔いカンパチ」「八郎サバ」がある。「北浦灘アジ」は、活きたまま漁獲したマアジを北浦漁港まで持ち帰り蓄養したもので、また、「ひむか本サバ」は、天然採捕した稚魚を飼育したものであり、それによって品質・肉質を安定化させている。「へべスぶり」も、北浦名産の「へべス」の絞りがかすエサに混ぜることで臭みが少なくなっている。

もちろんその他にも様々な天然魚が水揚げされるし、漁獲量日本一を誇るウルメイワシはちりめん、いりこのほか、アンチヨビソースに加工されるなどしている。また、蒲江地域の項でも触れたが、魚のすり身は北浦地域でも郷土食でもある。さらに、今や宮崎特産ともいえる深海魚「メヒカリ」や、当然のことであるが「伊勢えび」も簡単に手に入る。

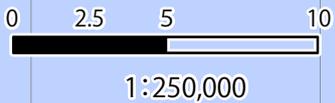
その他の特産品としては、「地下の茶山」のお茶もある。



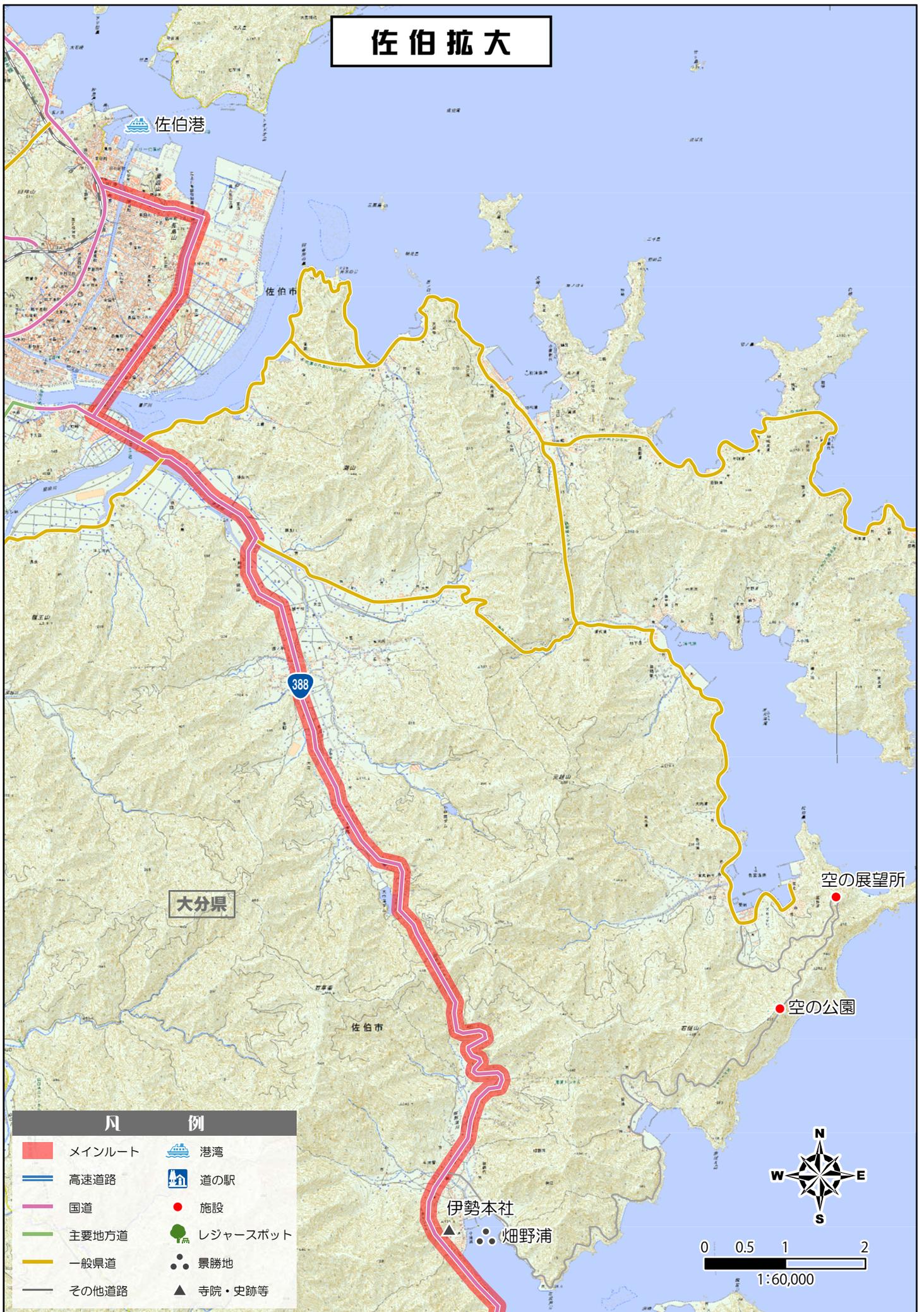
港湾	
浦城港	E-2
蒲江港	D-4
佐伯港	B-4
延岡港	F-2
道の駅	
道の駅 かまえ	D-4
道の駅 北浦	E-3
道の駅 北川はゆま	E-2
道の駅 宇目	D-1
道の駅 やよい	B-3
施設	
高平展望公園	D-4
横島展望台	D-3
シン垣	D-4
茶畑	D-3
七ツ島展望台	E-2
尻浦展望台	E-3
空の公園	C-4
空の展望所	C-4
あまべ渡世大学	C-4
里の駅 たかひら	D-4
かまえインターパーク	D-3

レジャースポット	
浦城海水浴場	E-2
須美江海水浴場	E-2
熊野江海水浴場	E-2
波当津海水浴場	D-3
蒲江海の資料館	C-4
仙崎つつじ公園	C-4
マリナルチャーセンター	D-4
ひむか遊パーク うみウララ	E-3
景勝地	
下阿蘇海岸	E-3
高山海岸	D-4
畑野浦	C-4
元猿海岸	D-4
島野浦島	E-3
寺院・史跡等	
伊勢本社	C-4
浦城水軍城址	E-2
島野浦西国三十三観音	E-3

凡 例			
	メインルート		港湾
	高速道路		道の駅
	国道		施設
	主要地方道		レジャースポット
	一般県道		景勝地
	その他道路		寺院・史跡等



# 佐伯拡大



# 佐伯蒲江拡大



大分県

佐伯市

● 空の公園

伊勢本社

●● 畑野浦

● あまへ渡世大学

佐伯市

388

● 仙崎つつじ公園

● 蒲江海の資料館

● 里の駅たかひら

● 高平展望公園

蒲江IC

● かまえインターパーク

道の駅 かまえ

● 高山海岸

● 元猿海岸

浦江港

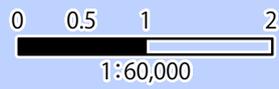
● シシ垣

● マリンカルチャーセンター

佐伯市

## 凡 例

- |  |        |  |          |
|--|--------|--|----------|
|  | メインルート |  | 港湾       |
|  | 高速道路   |  | 道の駅      |
|  | 国道     |  | 施設       |
|  | 主要地方道  |  | レジャースポット |
|  | 一般県道   |  | 景勝地      |
|  | その他道路  |  | 寺院・史跡等   |









九州風景街道ガイドブック

## 人のくに、美のくに九州 Q-2 日豊海岸シーニック・バイウェイ

---

平成29年7月1日 初版第1刷発行

著者 ルートガイド編纂委員会：樗木武、堤昌文、玉川孝道、吉武哲信、榎谷秀秋  
日豊海岸シーニック・バイウェイ担当（文責）：吉武哲信

発行 九州風景街道推進会議  
事務局（九州地方整備局道路計画第二課内）

---

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。